

吉田麻子著 『知の共鳴』

——平田篤胤をめぐる書物の社会史

(ペリかん社・二〇二二年)

武知 正晃

本書は平田篤胤関係資料をもとに吉田麻子氏が執筆したものである。二十一世紀に入り公開された平田篤胤関係資料により平田篤胤研究をめぐる状況は格段に変化を遂げたとされる。それを反映するかのようにな近年遠藤潤氏の『平田国学と近世社会』（二〇〇八年、ペリかん社）、中川和明氏の『平田国学の史的研究』（二〇二二年、名著出版）などの著作が刊行されている。

この三名の特長はなんらかの形で平田篤胤関係資料の調査に関わっている点である。このうち吉田氏と中川氏がほぼ同時期に著作を刊行した。両者の本を比較すると、同じ資料群を使いながらも、評価がことなる部分もある。執筆者の吉田氏は国文学の出身であり、本書の「付『鬼神新論』の諸本の成立について」などはやはり国文学出身者ならではの論考だと感じる。一方、中川氏は歴史学からのスタンスであり、本来専門を異にする研究者が同じ領域を対象としているのである。書評者は歴史

学出身である。これまで主に幕末維新前後の近江の平田派の動向について研究をしてきた。吉田氏や中川氏の研究史整理にあてはめれば「社会史的研究」ということになる。対象としてきたのは平田派研究で言うところの「没後門人」である。はずかしながら「平田篤胤の」——という論文はこれまで書いた経験はない。本書の書評者として適任かと疑問をもちつつも、また違う視点から意見を言うことも重要なことであろう。本書評では吉田氏の著作をメインにしつつ、近年の平田国学研究の動向を考慮しながら、中川氏の著作についても若干のコメントを行うことにしたい。

二

まず本書の構成は以下のとおりである。

序章 知の共鳴——平田篤胤をめぐる書物の社会史

第一部

第一章 平田篤胤の常陸・下総訪問

第二章 越後の平田国学——平田篤胤の越後巡遊と『医宗

仲景考』

第三章 気吹舎の著述出版構造

第四章 気吹舎における出版費用と門人たち

第五章 『稻生物怪録』の諸本と平田篤胤『稻生物怪録』

の成立

第二部

第一章 国学者平田篤胤の著作とその広がり

第二章 平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情

第三章 秋田の平田門人と書物・出版

第四章 幕末維新期の東信州と平田国学

第三部

第一章 平田国学の再評価と書物の社会史という視点

第二章 『鬼神新論』における人と神々

序章と第三部第一章で述べられている吉田氏の研究に関するスタンスを纏めると以下ようになる。

①従来までの平田篤胤像は、「近代的」視点に基づく枠組みにより、本居宣長などと比較して極めて「非合理的」な思想の持ち主であり、一段劣る評価がなされてきた。こういった見方が成立したのは戦前の「狂信的」な平田篤胤像に対する戦後の批判により、平田篤胤研究自身が省みられなくなり、実証的な再検討がなされぬまま現在に至っている。

②平田篤胤研究に関して、これまでも「篤胤の思想が近世後期の人々をとらえたのはなぜか」（三九六頁）という問いが立てられてきた。しかし、これまでの研究は思想を普及させる重要なツールである「書物」の成立と流通、それにともなう思想の普及という点に無関心であり、『平田篤胤全集』などから各著作の一部を恣意的に切り取り、それを研究者の枠組みに適合する形で篤胤の思想を再構成してきた。

③以上の点を克服するために筆者は、「書物の社会史」——篤胤のそれぞれの著述が出版された事情と、流布の様相、それに伴う人々の具体的な行動を史料によって明らかにすることを前提に、「近世の人々が平田国学に惹かれた理由」をテキストに内在的に求めていかなばならない」（三九九頁）と主張するのである。

まずは、本書の成果を纏めると以下ようになる。

第一点目の成果は、平田篤胤の基本資料の解説をもとに平田篤胤の著作の出版、流通の過程を明らかにした点である。気吹舎の出版の特徴としては、彫刻・印刷・増刷という過程を書肆を媒介とせずに、直接職人に依頼して行なったという点である。このような方法をとったが故、版木が書肆により分割されるといった問題も起きず、篤胤の江戸追放により出版差し止めになつていた際にも、本の刊行年記を変更してゲリラ的に増し刷りをするなどの手段をとることができたとする。

書物の販売方法については、(一)特定の書肆が売り広め所として割り印をもらい販売する、(二)書肆からの注文に応じて数冊ずつ渡し販売させる、(三)地方の代表的な門人にまとめて渡し、その土地の人々（主に門人）に販売する、(四)隼胤が地方巡遊の際に販売する、(五)直接気吹舎を訪れてきた者に販売する、という五つの販売方式があったとする。

篤胤生前段階では江戸を中心に書肆を拠点とする販売のみであったが、嘉永二年に篤胤が赦免となると、京・大坂・江戸の

書肆を介して販売されるようになる。幕末になるとこれが三都以外にも拡大し、慶応二年の売り広め拠点には信州上田、上州といった地方も含まれるようになる。さらに書肆だけではなく商家や地方の門人なども本の流通に関わり、門人が門人以外に書物を売り広めることも始められる。門人が書物の普及に関わることにより、営業目的で書物売るケースとはことなる形で社会に書物が普及し、思想の伝播にも大きな差をもたらしたであろうとする。

これとは別に「写本」という形態での流通もあった。原則写本は門人間のみが流通が中心であったと考えられるが、書肆を通じて販売されるケースもあったとされる。幕末になると、気吹舎の書物の海賊版が刊行される事件が起こるが、この事件は気吹舎の書物が書肆からも売れると見なされていたことを示している。

これまでも平田篤胤の著作の流通については、古くは渡辺金造の先行研究が存在していた。しかしそれらの研究は平田篤胤関係資料をすべて利用していたわけではなく、実証レベルでは十分な物ではなかった。したがって従来までは「幕末から明治にかけて広くよまれたもの」(二一四頁)といった漠然とした理解がなされてきた。従来までの思想史においては、篤胤の思想の江戸社会への普及をテーマとしながら、明治期において刊行された書籍を根拠として利用するケースがあった(三九七頁)。本書は、今後我々が平田篤胤の著作を検討する際に注意

しなければならぬ重要な指針を提起しているのである。

二つめの成果が平田篤胤像を取り巻く知的世界についてである。従来までの平田篤胤像は本居宣長などと比較して、その「非合理性」や「非実証的」な面が強調され、その受容者層も一段低いレベルであったとされる。これに対して筆者は篤胤をとりまく知的世界は決して近世社会の知的世界の外部ではなく、「その時代の知のあり方の中で篤胤が育まれた」と理解すべきであるという(一二頁)。本書では具体的な地域としては、秋田、越後、東美濃といった地域における平田門人および平田国学の受容層を検討している。

秋田の受容層には秋田藩の上層藩士が多いこと、受容者が増加すること、門人の周辺に山崎闇斎学の影響が見られるといった特徴を明らかにしている。そして秋田においては、門人たちが生田万の『古学二千文』の上木のために助成活動をしている。『古学二千文』は儒学の千文字のように韻を踏んだ漢文で古学の基礎を説いたテキストであり、儒学の素養の強い秋田という地域性に対応するための出版活動であったとする。

越後についても、鏡胤の残した日記を元に分析を行ない、鏡胤が接触した人々がその地方の有力な知識人たちであることを明らかにした。この時越後で最も多く販売された本が『医宗仲景考』であり、医学知識を持つ人々を対象にして平田国学の思想を普及しようとした意図があったこと、このような高度な専

門性を持つ人々を糸口に平田国学を普及させようとする方法が気吹舎の戦略であるとす。

一方、東美濃では、気吹舎書籍の流通に重要な役割をはたしたのが掛川吉兵衛である。掛川は平田門人ではないが、門人間のみで取引のゆるされる『仙境異聞』の閲覧を許されていることから門人同様であったとされる。掛川吉兵衛が普及に努力した気吹舎の書籍は『古学二十文』、『同読例付』など儒学の素養をもとに平田国学を学ぶ書物、『悟道弁』など初心者向けの入門書、『靈能真柱』『玉櫛』など比較的初心者向けのテキストが多かったとされる。またこの地域の特徴として白川関東執役であり気吹舎門人である古川躬行の『葬儀略』が広く普及したとされる。これは神葬祭の祭式が記された書物である。

三つ目の成果は、平田国学研究において従来から指摘されてきた嘉永期以後の「幽冥界」への「関心の後退」というシエーマについて、平田篤胤の著作の流布状況を根拠に見直しを提起したことである。『生稲物怪録』の成立について日本各地に残る諸本を検討し、従来から主張されてきた篤胤による創作はこの本には含まれていないこと、『生稲物怪録』の成立の背景には、当時の同時代的な学問的コミュニケーションが存在していること。『生稲物怪録』が『仙境異聞』などと共に幕末に流布していることから、幕末の政治化する平田国学の動向と民俗学的な探求を行う動向とは決して矛盾する行為ではないと主張する。

四つ目の成果は、平田鏡胤の歴史的役割を明確に提示した点であろう。従来まで、平田鏡胤に関する研究は皆無に等しかった。本書により、鏡胤が平田派の組織化、篤胤の残した稿本の管理などに極めて重要な役割を果たしてきたことが明らかになった。平田鏡胤については、すでに宮地正人が政治情報収集の面で評価してきたが、平田国学の思想の継承という面でも鏡胤が極めて重要な役割を果たしていたのである。

以上の四点が評者なりにまとめた本書の成果である。これらの成果をもとに第三部では平田篤胤の著作を「内在的」に読む試みがなされる。しかし、この部分は一章のみであり、筆者の今後の方向性を提示したものである。したがって、本書の最大の成果は平田篤胤の著作の流布状況、それを受容した門人たちの動向の分析を通じて近世社会における平田篤胤および気吹舎の動向を明らかにした点にあると理解してよいであろう。

三

著者は「同時代的に篤胤や幕末の平田国学を捉える」（三九二頁）、「平田篤胤の言説そのものを捉え直す」（四〇三頁）といった点を強調する。このような視点は著者のみが有する視点ではない。二〇〇八年に著作を刊行した遠藤潤氏も平田国学を同時代の吉田家や白川家の動向の中で検討したもので、このような視点は現在の平田国学研究のトレンドと言えよう。中川氏の著作『平田国学の史的研究』は、吉田氏と同じく「読書論」

を導入しつつ、十九世紀の近世・近代移行期の問題として平田国学を位置づけようとするものである。このような研究が登場してきたのも平田篤胤関係資料が公開されたためである。以下、近年の平田国学の研究の動向、中川氏の著作なども参考にしながら、本書に対する疑問点を述べることにする。

まずは受容層の問題である。著者は平田篤胤をとりまく知的世界は、従来から指摘されてきたような無知蒙昧な人々ではなく、近世における他の国学者などともその場を共有していたとする。この点について、中川氏は、著作の中で江戸における篤胤の講釈について、平田篤胤関係資料に含まれる「御国学講談」を根拠にし、「当時無名の講説家であった篤胤は、江戸市井の人々に語りかけていたのである。平田塾の原風景がそこにあった」と述べている（中川、三〇一頁）。ここで中川の言う「江戸の市井の人々」とはどのような人々なのであるか。中川氏によると、当時篤胤は手習い塾で講釈を行っていたようであるが、そこでは「表会」と「内会」という二つの会があり、「表会」は一般に向けた講釈、「内会」は門人に向けた講釈であったとする（中川、七七頁）。おそらく「表会」に参加した「市井の人々」の中からより関心のある者が「内会」へと参加し門人になっていくのであろう。この事例は初期の事例であるが、これを見ると篤胤をとりまく知的世界にも時期による差異があったのではないだろうか。

ただ時期的な差異以上に評者が重要に思うのは、著者の言う

篤胤をとりまく世界とは一体どのようなものであろうか。従来の研究では平田篤胤は常に本居宣長と対照的な存在とされてきた。極論を言えば、「宣長のなもの」とは「篤胤的ではないもの」、「篤胤的なもの」とは「宣長的ではないもの」、なのである。しかし本書では平田篤胤の民俗的世界への関心は決して当該時期において特異なものではなく、篤胤が当時の知的世界（宣長門や他の国学、儒学など）のコミュニケーションの中におり、そこから生まれて来たものであるとする。もしそうであるなら、同じ知的コミュニケーションの中で、それぞれの思想的な差異はどのようにして生まれて来るのであろうか。平田篤胤と対照的に描かれていた宣長門などの知的世界も再検討が必要になろう。宣長の後継者として門人をまとめていくのが本居大平であるが、これまで平田鏡胤の研究が重要視されなかったように、大平の研究も少ない。本書の功績の一つは平田鏡胤の動向を明らかにした点であるが、同じように本居大平・内遠らの動向や、本居門人と平田門人の重層なども今後再検討が必要になるのではないだろうか。

次に本書の中心的方法論である読書論について検討したい。「読書の社会史」という方法が歴史学や思想史学の中で主張され始めたのはいつ頃からであろうか。ロジェ・シャルチエの『読書の文化史』（新曜社）の翻訳が刊行されたのが一九九二年であるが、その頃からであろうか。その後、若尾政希の『太平記読みの時代』（一九九九年、平凡社）などが代表的な成果であ

らう。本会でも第三六号（二〇〇四年）に「思想をかたるメディア」として特集が組まれている。だが、本書では他の「読書の社会史」といわれる業績との比較検討についてはさほど触れられていない。本居派の書籍の流通について参考文献が挙げられている程度である（一四二頁）。

ここで、比較という意味で平田国学と同じく多くの門人を獲得した思想集団である石門心学の例を取り上げてみよう。高野秀晴「石門心学における教科統制力とその圏外——石川謙『石門心学史の研究』の再検討」（季刊日本思想史）第六五号、二〇〇四年」という論文がある。高野氏によると、石門心学の研究においても書物を通じての研究は行われなかったという。その原因は心学の場合、心学道話の研究が主であったためであるとする。その心学を「心学書」という視点から再検討したものがこの論文である。高野氏によると、「心学」あるいは「道話」というタイトルがある本でも心学者以外が書いたものが多数あるという。その中には心学をネタにしたパロディ本などもあったという。中沢道二の代表作『道二翁道話』にいたっては心学外部の者が出版した『道話聞書』に触発されて出版されたものだという。高野氏は、心学の普及を考える際には心学者外部のものが書いた書物も重要であり、心学と言う名のパロディ本であつても心学の教えを理解することが可能であつたという。高野氏はこのような心学をめぐる書物の普及を、「心学が講舎の枠をこえる学問へと「脱皮」し、「弘道」していく過程」と評

価する。

吉田氏は、「幕末期の気吹舎書籍の出版と流布は、まさに門人や支持者たちのひたむきな情熱を背景に「拡大させること」「秘める」ことの間に絶妙に漂いながら刻々と展開してゆくのである」と述べる（二四三頁）。評者は気吹舎による書物の出版・普及に関する方針は、石門心学などと比較して非常に「統制」が強いという印象をうける。このような形を気吹舎がとつた（ないしはとらざるを得なかった）のは吉田氏が指摘するとおり「危険を伴いながらも利益の得られない本を出版するという、商業出版の周縁」にあつたからであろう（一八頁）。おそらく吉田氏の指摘は正しいと評者も思う。問題はこのような出版をめぐる統制的な傾向が思想の普及・受容、さらには思想のあり方にも影響をあたえたのかという点である。この点は思想を受容した個々の門人を検討しなければならぬが、本書ではこの点については踏み込んでいない印象をうける。それはある意味当然で、吉田氏も述べているように、この本では「思想」を伝えるツールである書物の普及を実証的に抑え、それを踏まえてテキストの内在的な読みをすることが目標とされているからである。本書の中で、「読書の社会史」という方法は、あくまでもテキストの内在的な読みのための基礎準備という位置づけなのである。当該時期に、書物を「どう読んだか」「どう読まれたのか」については今後の課題なのであろう。

このような統制的な傾向については、一つだけ事例をあげる

ならば、明治初年の「黄泉の国」論争があげられる。黄泉の国がどこにあるかをめぐって、平田派国学者間で論争が起ころが、この時「黄泉の国」が地にあると唱えた渡辺玄包、西川吉輔の二人が詫び状を提出することになる（拙稿「西川吉輔直筆書状の翻刻と紹介」『立命館文学』第五九四号）。この時西川は平田直系の矢野、角田といった国学者とかなり険悪な関係になるが、評者はこの書状を翻刻した際に平田門が思想内容について強い「統制」の下にあると感じた。このような思想の統制と書物の出版・流通に関係する統制的な側面は相互に関係するのであろうか。

本書では、平田篤胤の書物の普及を門人による主体的な行為と高く評価する。そのように高く評価すると、さらに一つの疑問が生まれよう。いわゆる平田国学研究でしばしば指摘される「平田派の没落」の問題である。平田篤胤の書物が主体的に活動する「ひたむきな情熱」を持つ門人や関係者の力で社会に流布していったのなら、なぜ平田派は明治に入り衰退して行ったのだろうか。本書では明治四年の国事犯事件と平田延胤の死の境に平田派への入門や書籍の売れ行きが落ちるとする。統制者の不在と政治的な圧力が原因と推測するのである。この点に關しては中川も明治四年を一つの契機としている。平田派については明治初年の絶頂期とその後の急激な没落という極端な動向について、「裏切られた」「切り捨てられた」という評価をされることが多かった。今から二〇年前にこの点を検討したのが阪

本是丸氏である。阪本氏は『明治維新と国学者』（大明堂）の中で、①世間で言われるほど平田派国学者は明治政府の中で地位を得ていない、②少なくとも明治二年初頭まで岩倉の政治構想・主題は矢野たち国学者や神道家たちとはさほど大きく懸隔していない、③明治二年以後京都を中心とする国家構想にこだわる矢野ら平田国学者と岩倉らとの間に乖離が生まれた、④客観的情勢として東京では明治二年後半の段階で平田派の没落が始まっていたことを指摘し、これまでいわゆる「平田派の没落」と呼ばれてきた時期の動向を神道行政の中に位置づけ、平田派がその神道行政に与えた影響と限界を明らかにした。

吉田氏は明治以後の平田派の衰退については踏み込んだ議論はしていない。全国的な平田書籍の売れ行きや、国事犯事件の情報や伝播して各地の人々に与える影響などを考慮すると明治四年が一つの契機という理解である。阪本氏の主張は中央の神道行政内部の問題であり、次元が違うという反論もできよう。吉田氏の本はあくまでも近世の平田篤胤の書籍の普及がテーマであるので、この問題について触れなくても許されると思うが、近世・近代の移行期論を考える「平田国学の史的研究」をうたった中川氏がまったく阪本説に触れていないのはなぜなのだろうか。中川は明治初年の国学者と神道行政との関係を「平田派は——評者」万全の準備をする間のないまま文教行政・神祇行政に關与することになった。（中略）維新政権は利用できるときだけ平田派を使つたということではないかと思われ

る」(中川、三九三頁)と評価する。これでは阪本説以前への先祖帰りではないだろうか。

四

最後に両者の著作にまたがる共通の問題についてふれたい。前節で阪本説の扱いについて検討したが、評者は、吉田氏の著作にしる中川氏の著作にしる、先行研究の整理や扱いに違和を感じるのである。吉田氏は戦後の平田国学の研究方向を、(1)社会史的方向性、(2)思想史的方向性、(3)民俗学的方向性の三つの方向性に分類する。中川氏は、(1)国学思想史、(2)国学運動史と二つに区分する。中川氏は吉田氏が区分する思想史的方向性と民俗学的方向性をまとめて国学思想史とし、社会史的方向性と国学運動史とする。ここまではよい。吉田氏は、(2)思想史的方向性として、松本三之介、田原嗣郎をとりあげ、これらの研究を、国学思想を明治以後の近代天皇制イデオロギーの受け皿と評価する近代からの視点であると評価し、これに対して篤胤の思想を救済論としてとらえる子安宣邦氏の研究を近代主義に基づかない研究として高く評価する。松本三之介らが主張する近代天皇制イデオロギーの受け皿といった場合、その基礎には講座派理論的な天皇像が存在している。講座派理論は日本の近代を封建的要素を色濃く残すある種の「未完の近代」と捉えるものである。このような理解が、「未完の近代」であるからこそ、社会変革を成し遂げなくてはならない」というエネルギーを生

み出していた面もあり、戦後のある時期までは社会的に機能していた面がある。子安氏が七〇年代の早い段階でそれとは違う方向を模索できたのは子安氏が講座派理論の影響が強い歴史学系の外部にいたからであろう。したがって評者は松本・田原・子安を単純に一つのくくりとして扱うことに違和を感じるのである。

吉田氏の著作を通じて一貫して感じるのは、「近代的」な視点を極力排除するという姿勢である。しかし、本書では「近代」の明確な定義づけはなされていないように思われる。本書を読むかぎり、松本説を代表とする近代天皇制イデオロギーと平田派国学を結びつける理解を「近代的」な枠組みと理解しているようである。

一方、中川氏の著作でも、「近代以後につくられた平田篤胤像・平田国学のイメージに依拠せず、一次史料を中心に」研究を進めるとする(中川、一二頁)。吉田と同様近代的な枠組みを排除したいと言うことであろう。しかし、一次史料を基に歴史を再構成すれば自然と近代主義的な枠組みから解放されるのであろうか。中川氏の著作では青森を事例に地域の民俗学的な要素が近代社会へと継承されることを評価している。近代天皇制イデオロギーへの連続は「近代的視点」でダメだが、地域の民俗学の継承は良いというのであろうか。

中川氏がこのような結論に到るのは、平田国学の民俗学的要素を国民国家の枠外に、国民国家に統合されない領域として位

置づけたいからであろう。中川は、「日本型国民形成過程において、平田国学は吸収・統合されていったのであろうか。（中略）国民国家は人々を国民として統合することで成立したものとされる。従来の見方からすれば、平田国学は国民国家の形成に寄与して、そこにすべて統合されていたということになる。こうした通説的理解は平田国学の思想内容や平田派の動向を踏まえたものではないのである」と述べる（中川、四〇四頁）。引用した文は、「結論——総括と展望」の三節「平田国学の十九世紀——国民国家論の圏外へ」にある一文である。この文章を素直によめば、タイトルは「国民国家論の圏外へ」ではなく、「国民国家の圏外へ」の方が適切ではないだろうか。

残り少ない紙面で国民国家論に深く立ち入るゆとりはないが、最低限度確認しておくべき点があると思う。七〇年代あたりまで主張されていた近代天皇制イデオロギーによる統合といった場合の「統合」とは権力や地域社会の諸制度などによる「上からの強制的な統合」である。思想などの場合は「天皇制イデオロギーの注入」という表現がよく表すように上からの「強制」「注入」というニュアンスが重要である。この上からの強制に對してひたすら「被治者」の立場を貫くというのが七〇年代あたりまでの国学のイメージであろう。

これに對して近年の国民国家論の特徴は「自ら主体的に国民になる」という自発的な「統合」である。そうすると、むしろ吉田氏が描いたような「ひたむき」に主体的に活動する国学者

の方がかえって現在の「国民国家論」には適合するのだ。近年、近世史の側から行われる研究史整理において、しばしば国民国家論とそれ以前の段階との研究の質的差異が無視され、ただ「統合」を語れば国民国家論であるという評価がなされているように感じる。評者はこの両者の違いについて研究史上明確に区分すべきだと考えている。

吉田氏も中川氏も丹念に平田篤胤関係資料や日本各地の一次史料を読み込んで書かれた労作である。今後の平田国学研究がこのような方向で進むことは間違いないであろう。であるからこそ、これらの史料を丹念に読んだ結果を研究史上に意味付けるのであれば、先学の研究整理に慎重であるべきではないだろうか。以上、評者の誤解・誤読もあるかも知れないが、本書の刊行を契機に平田国学研究のさらなる発展を期待するものである。

（台湾首府大学助理教授）